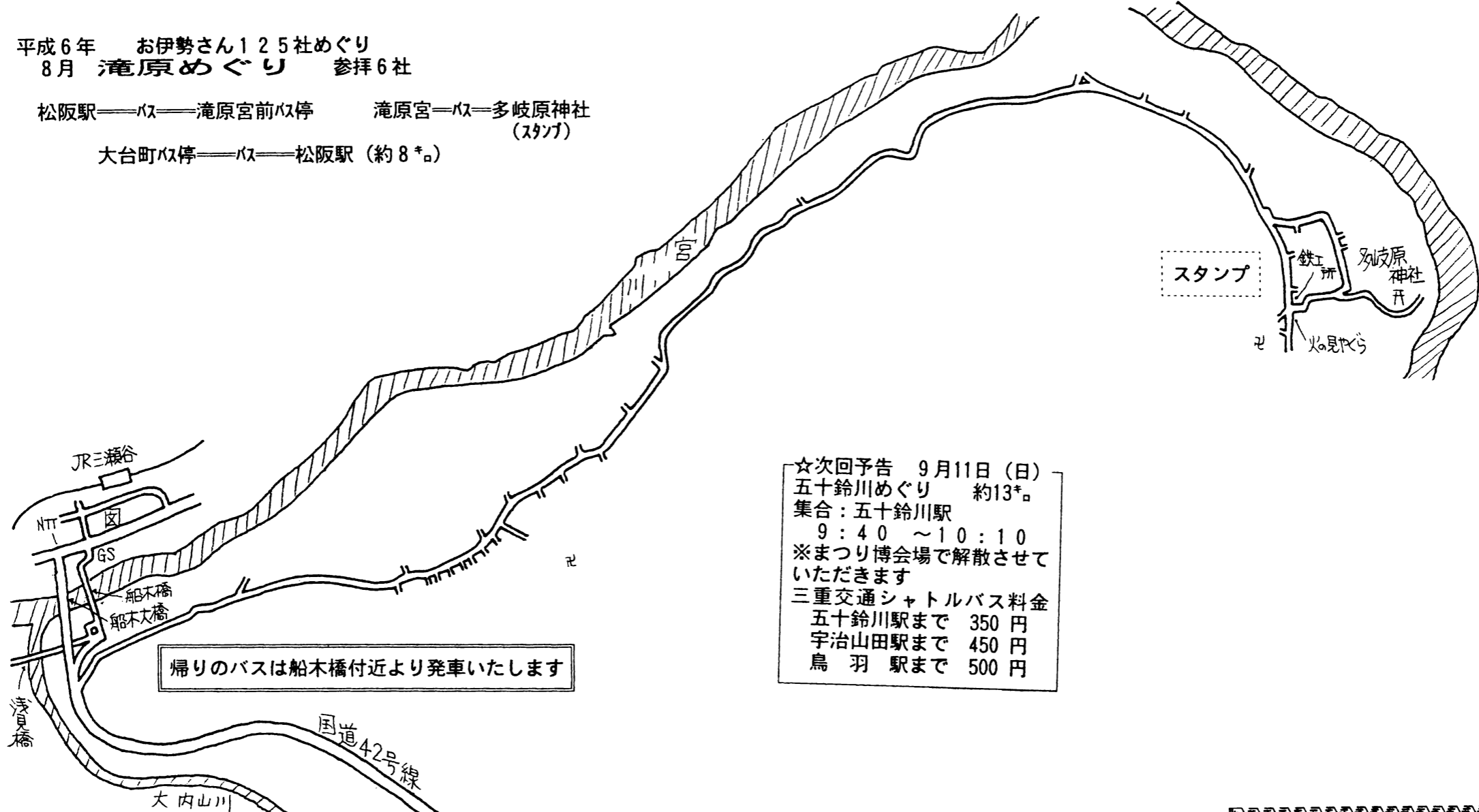
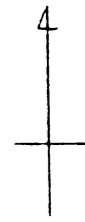


平成6年 お伊勢さん125社めぐり  
8月 滝原めぐり 参拝6社

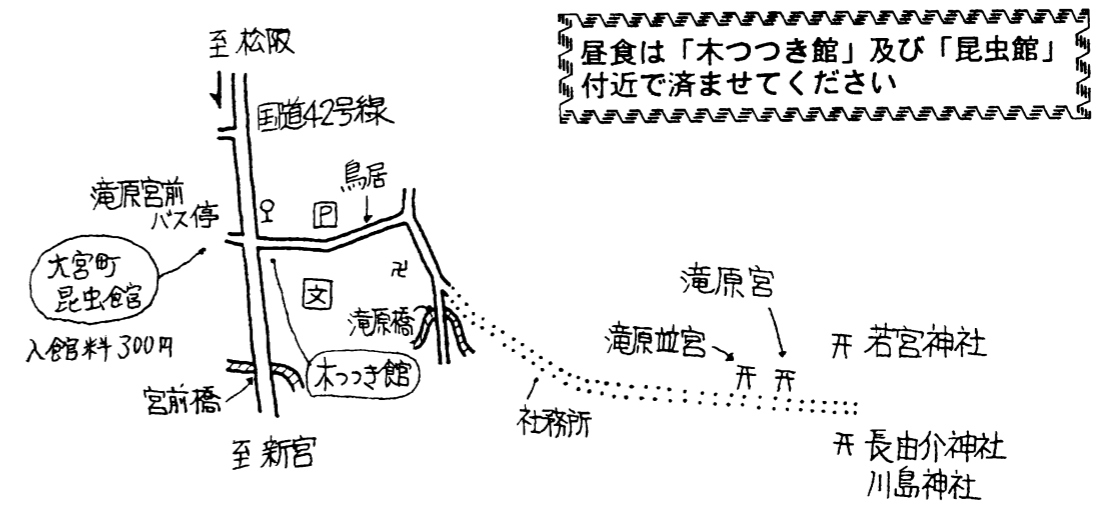
松阪駅—バス—滝原宮前バス停 滝原宮—バス—多岐原神社 (スタンプ)  
大台町バス停—バス—松阪駅 (約8\*)



帰りのバスは船木橋付近より発車いたします

☆次回予告 9月11日(日)  
五十鈴川めぐり 約13\*。  
集合：五十鈴川駅  
9:40 ~ 10:10  
※まつり博会場で解散させていただきます  
三重交通シャトルバス料金  
五十鈴川駅まで 350円  
宇治山田駅まで 450円  
鳥羽駅まで 500円

抽選券  
150  
物産原神社  
8/21



昼食は「木つき館」及び「昆虫館」  
付近で済ませてください

# 滝原めぐり

(大宮町)

昭和31年9月、滝原町と七保村が合併し誕生。古来滝原宮の神領地であり、熊野に詣でる街道沿いの宿場町として栄えた。

総面積101Km<sup>2</sup>、その88%が山林で占められている。奥伊勢宮川峡県立自然公園を擁し、風光明媚が財産である。

頓登川にかかる頓登橋を渡ると滝原宮の一の鳥居の前に出る。この橋は昔は太鼓橋で、二つの橋が相並んで別々にかけていたといわれている。

元は長さ八間で、寛文2年にはじめてかけられたものといわれている。

一の鳥居の前には衛士の見張所がある。宮域の神杉のたたずまいも神々しく、外には大内山川を控え、神域には頓登川が五十鈴川を思わせる清いせせらぎの音をたてて静かに流れる。

手洗は水盤を用いず、頓登川で手水を使うようになっている。

斎館の前を通過って奥深く進むと、宮居の荘厳な姿が目映る。

滝原宮、滝原竝宮及び所管社の長由気神社、若宮神社の四社殿と、御船倉及び御倉等の建物が建っている。

◎滝原宮（皇大神宮別宮）

祭神

天照坐皇大御神御魂

鎮座地 度会郡大宮町大字野後

殿舎

正殿	神明造萱葺鐵金物打立御階付南面	壹宇
端垣御門	猿頭門扉付	壹間
瑞垣	袖繰板内	壹重
玉垣御門	猿頭門	壹間
玉垣	角柱	壹重
鳥居	神明造	壹基
帷舎	切妻板葺	壹宇
御船倉	切妻板葺	壹宇
御倉	切妻板葺	壹宇
忌火屋殿	切妻柿葺	壹宇
蕃塀	横板嵌	壹重
宿衛屋	切妻柿葺	壹宇

滝原宮という宮名のおこりは、滝原という地名をそのままに宮名としたもので、滝原というのは、大内山川や頓登川に沿って大滝、雄滝、雌滝などという滝が48もあり、その原野、地勢を名としたものである。

この宮ははじめから宮号のある宮で、神宮の別宮の中でも、荒祭宮、多賀宮、伊雑宮と並ぶ特別の地位にある。宮域の東半分は、小字で宮野と呼ばれ、古くから御宮地にふさわしい字名を持っている。

往古は、この地のあたりは伊勢と志摩の国境で、西南から来る熊野街道の伊勢に入る関門で、大神宮領神郡の入り口を守護する御宮としても重要な地位を占めていた。この宮は古くから皇大神宮の遥宮といわれている。

皇大神宮延暦儀式帳には、「滝原宮一院伊勢国境在 大山中 大神宮以西相去九十二里在」とあり、

大神宮式にも「滝原宮一座大神遥宮・・中略・・右諸別宮祈年月次神嘗等祭供之」とある。

神宮別宮十所の一で、恒例臨時の祭祀官幣奉納の儀、すべて本宮に準ぜられる。

すなわちこのお宮は、皇大神宮と御同神の御魂を奉斎し、由って皇大神宮の遥宮といわれる。

皇大神宮儀式帳には天照大神遥宮

延喜大神宮式には大神遥宮と記されている。

遥宮というのは、トホノミヤと読み、遠宮という意味、天照大神の御蔭（御神威）を遠く離れた地に御奉斎申し上げた宮という意味である。

志摩郡磯部町の皇大神宮別宮伊雑宮が皇大神御魂を奉斎し、同じく遥宮と称せられているのと同じである。

滝原宮御鎮座の由来については、次のとおり。（倭姫命世記）

垂仁天皇の御代、倭姫命に奉戴せられた皇大神は、大和の国、笠縫村を御出ましになり、大和、伊賀、近江、美濃、尾張より伊勢に入られ、北勢より南勢に御遷幸された末、宮川の河口より宮川を遡られ、よき大宮所を求められた。

このとき、三瀬谷にて、土地の神である眞名湖神がこれを奉迎して滝原の宮所をお教え申し上げたのである。

倭姫命は、供奉の宇太之上宇祢奈に荒草を刈り掃わせ、宮殿二字を造立せしめた。これが本宮と竝宮である。

しかしこの地は皇大神の御心に叶わせられずとの御神意により、倭姫命は、さらによき大宮所を求めて七保（現大宮町）の山々を越えられ、一之瀬村和比野（現度会町和比野）の地に出で、これより再び宮川を下られ、五十鈴川を遡って遂に現在の大宮所に鎮座されたものである。

# 神楽歌

白糸のたえずおちくる滝の原

あとたれそめて いくよへぬらむ

荒木田 延季

滝原本宮と竝宮との関係は、共に皇大神御魂をお祭りしながら、何故、二宮が相並んで同じ場所に奉斎されているのか、昔からいろいろ論じられている。最も一般的に信じられているのは、本宮は皇大神宮の和魂を、竝宮は荒魂を奉斎したということである。これは内宮の本宮と荒祭宮とのつこに移したという考え方である。

## ○滝原竝宮

祭神

天照坐皇大御神御魂

鎮座地 滝原宮宮域内

殿舎

正殿	神明造萱葺鐵金物打立御階付南面	壹宇
瑞垣御門	猿頭門扉付	壹間
瑞垣	袖繰	壹重
玉垣御門	猿頭門	壹間
玉垣	角柱	壹重
鳥居	神明造	壹基
幄屋	切妻板葺	壹宇

滝原竝宮は、皇大神宮の遥宮で滝原宮の西方にあり、皇大神御魂を奉斎する宮である。

皇大神宮延暦儀式帳には

「滝原宮一院。（中略）称天照大神遥宮（中略）竝宮一院」とあり奉納の儀式は本宮に準ぜられている。

竝宮の起源は、滝原宮の項のとおりであるが、往古には滝原宮の祭使として祢宜が参向したとき、滝原宮で祝詞を奏申し、竝宮にはそのことがなかったようで、また、神名式には滝原宮があって竝宮の記載のないことなどを考えると、滝原宮は皇大神の和魂宮、竝宮は皇大神の荒魂宮で、古くは滝原宮、すなわち和魂宮が之を代表されたようである。

延喜の時代、月次官幣にあずからなかった竝宮が、その後これにあずかるようになったのは、祢宜文書所収、文永六年、卜部兼文の勘申にも

「竝宮不預月次祭不載神名帳尊崇之儀軽重雖異延喜式以後追令奉行官幣」

とあり、明らかである。

○御船庫

竝宮の西にある。伝説によると倭姫命の御遷幸のとき、宮川を遡ってこられたときの御船をおさめした御庫といわれているが、実際は滝原宮の御船代の古いものをおおさめ申し上げておく所である。

◎長由気神社（滝原宮所管社）	祭神	長由気神
鎮座地	滝原宮宮域内	
殿舎		
正殿	神明造板葺西面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

本宮の東にあり、若宮神社ととなりあっている。長由気神社は西面し、若宮神社は南面している。

長由気神社は儀式帳、延喜大神宮式ともにその名が載っており、皇大神宮年中行事の寛正の加筆の部分及び氏経神事記にはじめてその名があらわれる。

民間信仰では、長由気は長生と同じで、長生の神太田命、猿田彦命を祭ったものとして江戸時代宣伝された。

神宮要覧には祭神を豊受大神の御霊に擬す。造営の古儀は明らかではない。

寛文以後神宮において御造営を行ない、明治七年、従来南面であった神殿を改め西面とし、かつ玉垣御門壹間、玉垣壹重を増し、二十二年より、造神宮使廳で修繕をしたとある。

◎若宮神社（滝原宮所管社）	祭神	古来不詳
鎮座地	滝原宮宮域内	
殿舎		
正殿	神明造萱葺鐵金物打南面	壹宇
瑞垣御門	猿頭門扉付	壹間
瑞垣	神繰板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

一名天若宮と称し、末宮帳式外社で滝原宮に所属する。創立年代は不詳であるが、社名は鎌倉時代、安貞二年（1228）の内宮遷宮記にみえ、皇大神宮年中行事寛正の加筆並びに氏経神事記永享八年條等に、本宮より参向の奉幣使拝察の事実がみえているので由緒の久しいのがわかる。

祭神は不詳。野後村古老の説に、天之水分神を祭るといふ。これは、滝原二宮を速秋津日子、速秋津比売二柱とする附会説にもとづき、さらにその御子である天之水分神に附会したものである。

また、若宮神という人もある。これは、長由気の御饌津神と相並んで、水の神として滝原宮の御神供に奉仕された大神である。

◎川嶋神社（滝原宮所管社） 祭神 不詳  
鎮座地 滝原宮宮域内長由気神社と同座

川嶋神社は長由気神社とその沿革を同じくする。ただし、寛正以後、社殿頽廃。所在地不詳により、寛文の造営にも関わられず、明治維新に及んだ。明治七年、ついにこれを長由気神社に鎮祭した。

創立年代 祭神共に不詳、社地について諸説あるが、いずれも根拠薄弱である。

末宮帳式外社で、本社の名は皇大神宮年中行事加筆の條及び氏経神事記にはじめてその名がみえる。

長由気神社とおなじように室町時代に奉斎されたようである。

◎多岐原神社（皇大神宮摂社） 祭神 眞名湖神  
鎮座地 度会郡大宮町大字三瀬川

多岐原神社は、延喜大神宮式並びに神名式に記載あり。また、「皇大神宮儀式滝原神社」にもある。

大神宮本記に、倭姫命の皇大神を奉じて相鹿瀬より宮川の上流にそいて涉りまししとき、砂をも流す早瀬あり、渡り煩ってられる所へ眞名湖神が参り、案内して渡し奉りし縁故により、その瀬を眞名湖の御瀬と名づけ御瀬の社定め給うと記してあるが、これが本社の起源であろう。祭神の眞名湖神であることは儀式帳にもみえている。

本社の御名を一名御瀬社という。この川の瀬の流れの早いのに倭姫命も難儀されたのであろう。

社頭には常夜灯が二基ある。また享保甲辰の年に紀州藩からたてられた殺生禁断多岐原神社の石標がある。山水の美をかねそなえた社域である。

眞名湖の御瀬は、下流のダムのため面影をとどめていないのは残念であ

る。

寛文三年現地に再興

(大台町)

○北畠神社(無格社) 祭神 北畠顯能公 北畠具教郷

元龜、天正の昔、北畠国司九代目北畠具教郷が、三瀬御所を構えていた旧跡で、永禄十二年織田信長の伊勢征伐により、同信雄を北畠の家督人に定めて以来ここに幽棲し、北畠の再興を図ったが、天正四年秋十一月、刺客の襲うところとなり、北畠国司の最後の地となったところである。

ここに小祠のまつられていたのを明治十六年改造し、現在の神社となった。

○三瀬館跡

戦国時代、伊勢五郡を領し、近隣に威を振るった北畠氏は、大河内城で織田信長軍と合戦した。(永禄12年 1569)このとき一旦和議を結び、元龜三年北畠具教一族が、三瀬のこの地に館を構え移り住んだ。

天正四年、信長の刺客により暗殺される。

# 滝原宮宮域の自然

## 1 概要

垂仁天皇の即位25年、皇女倭姫命が、この地に宮殿二字を造り鎮祭せられた。

地勢は面積43.9ha、東西約1,000m、南北約400mの楕円形の社叢を形成している。

地質は大体、秩父古生層により構成され、土壌は比較的腐植土に富んで肥沃である。

外観は、主としてスギ、ヒノキが混合する針葉樹林であるが、イチイガシ、クスノキ等の照葉樹林の高木も入り混じっている。

## 2 林相の変遷

昭和46年、立木を調査した記録があるが、胸高直径4cm以上の樹木が94種、6,000本で、主な樹種の構成は、針葉樹が22%、照葉樹が73%、落葉樹が5%である。

昭和20年以前には、直径2mに及ぶ、通称「太郎杉」「次郎杉」と呼ばれる2本の巨木があったが、20年6月26日、爆弾7~8個が投下され、2~3年後に相次いで枯損してしまった。

## 3 樹木について

○テンダイウヤク・・・天台烏薬                      クスノキ科

中国の揚子江以南の各地が原産地。我国や台湾、フィリピンに帰化。栽培もされている。

我国では約250年前の享保年間、将軍吉宗が薬用植物として輸入したが現在では三重、静岡、和歌山、宮崎の各県の一地方に野性化している。三重県では主として紀州地方であるが、滝原宮域にも成育している。

秦の始皇帝が、不老長寿の霊薬として徐福一行に命じて熊野に探究にきたといわれる。

和名「テンダイウヤク」は、実が黒熟するので烏薬という。特に中国の天台山に良質のものを産する。芳香性健胃薬として売られている。



### ○クスノキ

「奇しき木」が訛って「くすのき」となったもので、多種の樹木の中でも「奇妙な木」、「不思議な木」、「すぐれている木」等の意味を持っている。このような意味の解釈には、香が高いからとも、あるいは年久しくなれば化石になるというところから「奇しき木」というとの説がある。

漢名は「楠」で、樟脳成分が採取される。また、香料、皮膚刺激剤として、打撲傷、凍傷、神経痛、リウマチ性疼痛に応用されている。

### ○タブノキ

漢名は「楠」、クスノキ科の常緑高木、別名「イヌグス」。照葉樹林の主要構成樹で、本州、四国、九州の海に近い暖地に自生する。

仏事にお供えする線香は、スギ、ビャクダン、チョウジの粉末とタブノキの樹皮（たぶかわ）を粘料としてつくられる。鳥羽地方では、タブノキを削って、その削り面に戒名を書いて墓地に立てる風習がある。

### ○カシ

榿又は榿とも書く。ブナ科の常緑高木。アラカシ、アカガシ、シラカシ、イチイカシ、ウラジロガシ、ウバメガシなどの種類がある。

アラカシは関西方面の山野でごく普通に見られる。ウバメガシを木炭に焼いたのが有名な「備長炭」である。

### ○モチノキ

暖地の山野に自生する常緑高木。雌雄異木でよく庭園樹として植えられている。古くは小鳥をとる「とりもち」を、この木の樹皮をたたきしぼり出した。また、材はくるいが少ないため、数珠、そろばん玉、玩具、版木などに用いた。

### ○アオキ・ 「青木」

ミズキ科の常緑低木で、枝も緑色であることからその名がついた。

宮城県以南の本州、四国、九州、沖縄の樹林下に自生する。雌雄異木で雌株は、冬、赤い実をつけるので庭木としてよく植えられている。

古くから、葉を火にあぶり、やけど、切り傷にはりつけた。また、牛馬の飼料としてもよく使われた。

### ○クチナシ

アカネ科の常緑低木で、静岡県以南の本州、四国、九州の暖地に自生す

る。6～7月頃白い花をつけるので 庭木として植えられ、また切り花にもなる。

雌雄異木で 雌株は11～12月頃黄赤色の実をつける。最近八重咲きクチナシが市場に出回り よく植えられているが、この種は実をつけない。

古くより完熟した果実は食物、布地等の黄色染料に使われた。和名「クチナシ」は、果実が熟しても口を開かないところからその名がついた。

### ○ケヤキ

古くは「ツキ」（槻）ともよばれたニレ科の落葉広葉樹で、本州、四国九州に自生する。和名は林叢の中にあっても、他の植物よりもよく成長して優位に目立つことが多いので「けやけき木」（きわだつ木）という意味である。

材は特有の美しい木目があるので 建築材、家具材などで広く重用される。

### ○エノキ 「榎」

「榎」は和字で 夏、よく茂って 樹陰をつくって人に親しまれることにより「榎」となった。

和名には色々の説があり 「好」（えし）の木、変化して「えの木」材が道具の「柄」によく使われるので「柄の木」 二代将軍秀忠の参勤交代制度確立のため、諸国の一里塚に「エノキ」が選ばれ、それが成長して同祖神思想的となり 神霊が天上より降臨する木として「称賛する木」「タタエる木」「タタエノ木」の「タタ」が省略されて「エノキ」になった等である。

### ○カキ

原産地は中国らしいが、日本でも古くから栽培されていたと思われる。

「延喜式」によれば、宮廷でも栽培され、干し柿にもされていた。

カキの語源は、赤い実のなる木、アカキ（赤木）の「ア」が省略されて「カキ」となったもの。渋は渋紙及び塗料として持ちいられる。